

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4290500398		
法人名	社会福祉法人 恵光会		
事業所名	グループホーム東大村		
所在地	長崎県大村市東大村2丁目1616番地3		
自己評価作成日	令和4年8月19日	評価結果市町村受理日	令和4年12月21日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/42/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ローカルネット日本評価支援機構		
所在地	長崎県島原市南柏野町3118-1		
訪問調査日	令和4年10月4日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

令和4年4月1日開設。協力病院は、中田外科胃腸科2回/月往診。前田皮膚科2回/月往診。山口耳鼻科1回/3月往診。野島歯科1回/月往診。医療的支援は往診で対応し、利用者様の通院負担の軽減を図っている。また、久原薬局の一本化を行うことにより、服薬方法や副作用などの連携も円滑にできている。行事については、月行事季節行事など計画的に行うことにより、利用者がマンネリ化にならないよう支援している。スタッフは、法人内の訪問介護員経験者とグループホーム慈恵荘で勤務している職員で支援を行っており、介護経験豊富なスタッフで支援している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

本年4月に開設した1ユニットのホームで建物の3階に位置している。同建物内には系列のグループホーム慈恵荘があり、避難訓練の際には事業所の職員同士が、初期消火、消防機関への通報、入居者の避難誘導等、限られた人員の中で連携して対応している。コロナ禍で入居者への面会制限が続く中、職員は家族に対し日ごろの入居者の様子のほか診察結果や食事・排泄・睡眠などの情報を丁寧に伝え、家族の安心に繋げている。職員間のコミュニケーションも良く、職員の急な休みが発生した場合にも互いに助け合うチームづくりができています。施設長は職員の家庭環境や健康状態の把握に努め、職員と施設長が率直に話し合える風通しが良い関係を構築すると共に、職員が働きやすいと感じる職場環境づくりに取り組んでいる。新設のホームであるものの、経験豊富な職員がケアを行い、また、関連事業所との連携体制を整備されており、今後の更なる入居者支援に期待が持てる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

ユニット名グループホーム東大村3F

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	令和4年開設。法人内移動により介護経験者が従事者の為、法人開設時の50年前からの理念である「至誠天に通ず」を、利用者・家族・職員等にも理解しやすいように「まごころと思いやり」という言葉で掲示し、接遇面でも意識して取り組んでいる	職員は理念を担当者会議や朝礼等で確認すると共に理念である「まごころと思いやり」を踏まえ、入居者優先の姿勢で業務優先にならないよう日々の実践に努めている。また、いつでも理念を確認できるよう紙に理念を印刷したものを所持し周知している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍で交流はできていないが、同施設内のグループホーム慈恵荘が例年であれば東大村小学校の運動会と茶もみ体験。大多武地区夏祭りの参加も行っている。町内会には法人として介入し、総会などには管理者が出席しているため、同様の交流ができる。	コロナ禍で地域住民との交流は自粛しているが、近隣小学生の登下校時に挨拶を交わすなど防犯対策にも寄与したり、同法人系列の保育園児と交流会を企画するなど、コロナ感染症に留意しながら取り組んでいる。施設長はコロナ終息後には地域行事等への参加を再開していく意向である。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症に関しては、運営推進会議を通して話を行っている。大村市の認知症施策の認知症ほっとライン事業に参画し、地域住民に伝えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	行事内容の取り組みや利用者の状況報告を行いサービス向上に臨んでいる。コロナ禍においては書面会議で実施している。	運営推進会議はコロナ感染状況により書面会議にて開催している。家族代表、町内会長、市長寿介護課、地域包括支援センター、民生委員、老人会会長、知見者(介護支援専門員)、入居者から構成し、各メンバーより率直な意見や質問等が出され、有意義な場となっている。身体拘束、ヒヤリハットの取り組み等も報告し、運営の透明性の確保に繋げている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議で、グループホームの運営状況と活動状況を報告し、書面や電話で助言を頂いている。	日頃より市担当者に運営状況や活動を報告し、不明点があれば相談したり指導やアドバイスを受けるなど協力関係を築いている。施設長は大村市認知症グループホーム連絡協議会の会長を務め、イベントや研修会をコーディネートしたり必要に応じて行政とも連携しながら取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束についての勉強会を行い、運営推進会議(身体拘束ゼロ推進会)で報告し、身体拘束につて助言を頂いている。	ホームでは身体拘束ゼロに取り組み、訪問調査時点で身体拘束を行っている入居者はいない。毎月、職員全員が参加する身体拘束についての勉強会を開催し、職員の身体拘束や虐待防止への意識を高め、椅子への座りっぱなしやスピーチロックなども意見を出し合い、身体拘束に該当しそうな行為にも留意しながら介護実践に努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	部・外部研修会への参加を行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	利用者の中に成年後見制度を利用している方がいらっしゃる。職員の把握も含め情報共有を図っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前の契約については施設でできることとできない事の説明を行い、質問に関しては丁寧に説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者や家族からの要望は適宜受け、その都度職員へ伝えている。必要な事柄については運営推進会議で伝えている。	コロナ禍で入居者への面会制限が続く中、職員は家族に対し日ごろの入居者の様子のほか、診察結果や食事・排泄・睡眠などの情報を丁寧に伝え、家族の安心に繋げている。職員は入居者との日々の会話の中から要望等を聞き、把握した内容は必要に応じて運営に反映させている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員からの提案については日々主任と副主任が連携を図り、管理者へ報告相談を行い実施につなげている。	施設長は職員の家庭環境や健康状態の把握に努め、職員と施設長が率直に話し合える風通しが良い関係を構築すると共に、職員が働きやすいと感じる職場環境づくりに取り組んでいる。職員間のコミュニケーションも良く、職員の急な休みが発生した場合にも互いに助け合うチームづくりができています。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	希望公休の取得、有給休暇の取得。職員の希望に添うように務めている。各自の家庭環境や健康状態の把握に努め働きやすい環境作りを行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	各階にグループホーム勤務経験者を配置しケアの向上に努めている。施設内の勉強会については担当制を用いて全職員で取り組むように行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	認知症グループホーム連絡協議会の介入を行い、事例検討会の資料については職員へ周知し、情報共有を図っている。		
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	アセスメントを行う際に生活歴や家族構成の聞き取りを行い、会話の中で、昔の仕事や家族の話題を話すことで信頼関係の構築に努めている。「パーソンセンタードケア」という考え方に基づいた認知症ケアに努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の要望や困りごとには、個別支援に反映できるように、職員へ伝達し、全職員取組み、適宜情報提供を行っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	各々の利用者の身体面、精神面の観察を行い、適宜サービス内容を変更している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	各利用者の残存機能が活かせるように茶碗洗い、茶碗拭き、洗濯物たたみ、洗濯物干し、調理などの作業に参加してもらえるように日々努力している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族写真や手紙など見る機会を意図的に作り、家族との関係性を深めている。定期的な通院は家族へお願いしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないう、支援に努めている	会話の中で昔利用していたスーパーや食べ物屋さんなどの話題を用いてつながりを深めている。馴染みの場所をドライブする機会を作っている。	コロナ禍により入居者の友人や知人といった馴染みの方との面会を制限しているが、友人と会話ができるよう電話を取り次いだり、手紙でのやり取りを継続できるよう支援している。家族の協力を得ながら馴染みの美容室や墓参りなど本人にとっての馴染みの場を継続できるよう努めている。	令和4年4月に開所したホームで、馴染みの人や場との関係継続の支援はこれからの取り組みと言える。職員が入居者との日々の関わりの中で馴染みの人や場所の情報を把握することが想定され、今後、入居者本人の思い入れのある場所や人との交流に繋げるなど、把握した情報を個別ケアに反映し、関係継続のための支援に取り組むことに期待する。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	食事の席やレクリエーションの席などは気の合う仲間の近くに誘導し会話ができる雰囲気を作っている。また、特定利用者との関わりにならないように適宜席替えも行っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後も法人内の施設であれば面会に行っている。家族からの問い合わせには丁寧に対応している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	生活習慣の把握に努め、起床時間や就寝時間などこれまでの生活状況に合わせるように取り組んでいる。	入居者の思いや意向を職員が日々聞き取り、入居者のお気に入りの衣類や大切にしている位牌などの持ち込みを促すなど、支援している。家族からも過去の生活状況を聞き、職員間で共有してホームでの生活に反映するよう取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用者の部屋は、自宅で使い慣れた物を持参していただき、在宅生活の延長ができるように勤めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人一人の心身の状態の把握に努めその方に合ったタイムスケジュールの提案を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	サービス担当者会議の際は本人の意向と家族の想いをヒントにアセスメントを行いBS法を用いることで意見を出しやすい雰囲気を行い計画書に反映している。	サービス担当者会議で職員が意見を出し合い、参加できない職員にはあらかじめ意見を聞き、職員全員の意見を反映して介護計画を作成している。また、必要に応じて法人内の理学療法士や看護師にも助言を得て作成している。入居者との面会時に家族へ介護計画の内容を説明し、家族より同意を得ている。計画の見直しは定期に、変化があれば随時行っている	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別のケース記録、医療情報、介護情報ファイルの作成を行い、毎日の引継ぎと業務連絡等で情報共有を図っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者の身体状況に合わせ残存機能が活かせる支援に取り組んでいる。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	他の施設との連携を図り、必要な時は住み替えができるように行っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	馴染みのかかりつけ医の継続のほか、内科協力医の(月2回)の往診、歯科(月1回)・皮膚科(月2回)・耳鼻科(3月1回)の往診・通院など、状態に応じて対応している	入居時に、入居者及び家族へホームの協力医との医療連携について説明している。入居後はホーム協力医へ変更してもらい、入居者は協力医による訪問診療を受診している。隣接する特別養護老人ホームと連携し、医療的な措置が必要な方には即座に対応できる態勢を整備している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	法人内の特養看護師と連携を図り、医療的なケアの助言を受け、支援に反映している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	医療機関とのソーシャルワーカーとの合同勉強会などに参加し、顔の見える関係性の構築に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居説明時より終末期に至るまでの計説明と同時に家族の意向確認が適宜できるように互いに相談し、よき方向に支援ができるように勤めている。	ホームで看取り支援は行わないことを入居相談時に入居者及び家族へ伝え、了承のもと入居契約を行っている。終末期の傾向がある場合は、主治医の指示を受け、連携する医療機関や同法人の特別養護老人ホームなどと連携し、必要な施設等へスムーズに移行できるよう支援している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	同法人内の看護師より、急変時や事故発生時の対応について、助言をもらい、マニュアル更新を行っている。緊急時対応シートを作成している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を日常的に防火管理及び消火、避難訓練等を実施することにより、全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。 また、火災等を未然に防ぐための対策をしている	地域防災協力体制がある。施設内はオール電化設置とし、火災防止に努めている。防災グッズの確保。月1回の防災自主点検を実施している。	非常時の職員の役割分担や緊急連絡網は事務所内の目につきやすい場所に掲示し、職員の意識付けを図っている。コロナ禍により、現在は自主訓練を実施している。訓練は年2回実施し、毎回、訓練を検証して課題を次に繋げている。今年度は12月に消防署立会いのもとで避難訓練を予定している。	同法人の関連施設との連携が図られているが、開設から日が浅く、また、コロナ禍ということもあり、今後更に地域住民との交流を深め、協力体制を構築しながら、災害対策へ取り組むことに期待する。また、自然災害が顕著になっていることを踏まえ、ハザードマップを掲示するとともに、作成中のBCPの運用に向けた訓練実施等、今後の取り組みに期待する。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者と呼ぶ際や説明するときは、名前を呼び個人の尊厳に留意している。選択肢のある声掛け、クッション言葉を使うように心がけている。	職員は入居者を制止するような場面でも、かかる時間や理由を述べたり、排泄失敗時には他の入居者に気づかれないよう言葉かけや対応を行い、その方の自尊心や羞恥心を傷つけないよう努めている。同性介助にも応じ、同性介助が困難な場合には入居者及び家族に説明し、同意を得た上で支援している。入居者の個人情報はキーパーソン以外には回答しないことを基本として個人情報漏洩にも留意している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	余暇活動時はいくつかのメニューを準備し選択していただいている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	個別に必要な方は職員と利用者と相談しながらタイムスケジュール表を作り、本人のペースで生活ができるように取り組んでいる。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	2月に1回「おしゃれの日。(化粧の日)」を開催し化粧する機会を意図的に作っている。男性利用者は髭剃りや整髪、眉を整えるなど鏡をみながら、身だしなみができるように支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事提供の際にはメニューの説明を行い、食事意欲を引き出している。後かたづけ、茶碗拭きなどは交代制で行っている。	食事は一部外注し、主食と汁物を職員が調理して、提供している。入居者と一緒に団子をつくったり、かき氷を削って蜜をかけたり、ケーキにつけるジャムを選んでもらうなど、食事が楽しみなものとなるよう支援している。施設長が兼業農家で、自宅で栽培したカボチャや玉ねぎなど旬の野菜等を差し入れている。本年、12月にはすべての食事を職員の手作りに変更する予定である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事と水分量については毎日記録に残し、日々の把握に努めている。飲水量の少ない利用者には好んで飲んでもらえるものを随時検討し提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアと口腔ケア後の確認と一部介助を行いを行い、口腔内の衛生管理に努めている。また、1回/月歯科往診の際は全利用者の口腔内経過観察、個別でブラッシング指導と歯ブラシ、舌ブラシ歯間ブラシなどの購入を行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	オムツ販売業者との連携により、個別対応ができるように試供品を提供してもらい、おむつの当て方の助言を受けている。また、排泄票の記録と時間誘導を行い、失禁防止に留意している。	日中におむつ利用の入居者は居らず、個々の排泄パターンに応じてトイレへ誘導している。排泄チェック表を作成し、排尿間隔を掴んで排泄の自立を支援している。おむつ、リハビリパンツ、パッド等の使用に際し、随時、家族とも相談しながら経済的な負担が少なくなるよう検討している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	日常生活の中で動く機会を作り、便秘症については主治医の指示のもと整腸剤や下剤を調整し、便秘にならないように心がけている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	利用者の希望と生活習慣に合わせ対応している。お湯の温度も利用者の好みに合わせ対応している。	週3回、午後入浴を基本として支援している。入浴を無理強いせず、入居者の状態や希望に応じた入浴に努めている。入浴を拒否する方には声掛けや対応方法を工夫し、清拭や足浴など臨機応変に行っている。入浴は職員とマンツーマンで行い、羞恥心にも配慮し、要望に応じて同性介助を行っている。季節に応じて菖蒲湯やゆず湯など入居者の気分を変える工夫を行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	午睡箕望の利用者や横になりたいタイミングの利用者には、部屋に誘導し休んでいただいている。(昼夜逆転にならないようにメリハリをつけている)		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬局より薬事情報をもらい、職員で把握している。服薬を受け取る際に注意点を尋ねている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	お手伝いを行っていただくときには「お願いします。」お手伝いが終わった後は「ありがとうございました。」と感謝の気持ちを毎回伝えている。利用者がやりたいもの探しを常に行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍の為ホーム周辺の散歩とドライブを行っている。	入居者が選挙の投票に合わせて外出できるよう支援を行っている。コロナ禍により積極的な外出支援は自粛しているが、近隣の駅画像へ参拝したり、隣接地の紅葉を眺めに散歩するなど季節の変化を楽しめるよう支援している。コロナ感染対策を講じ、入居者の気分転換を図れるよう支援している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	R4.4/1開設。お金を使う機会がない。コロナ禍で買い物をする機会がない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	面会制限の為、電話での対応は行っている。 暑中見舞いは行事の写真とともに郵送した。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	壁画は春夏秋冬を貼り季節感を出している。 空調などは室温計を見ながら適宜温度調整を行っている。季節の花を飾っている。	共用空間の窓から見える景色からは春夏秋冬の季節の変化を感じることができる。次亜塩素酸水を用いて手すりなどの要所の拭き掃除を定期的に行っている。机や椅子の配置は入居者同士が密にならないよう工夫している。温度管理を行い、適宜、換気を行うなど、入居者が居心地よく過ごせるよう配慮している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファや家具調の椅子を設置し、自由に使うことができるよう行っている。また、施設の端々にベンチを設置し気の合う利用者同士会話ができるよう取り組んでいる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅で使い慣れた物を持参していただき、本人が見えるところに置いている。	居室には本人の使い慣れた家具やテレビ、仏壇などを持ち込むことができ、馴染みの物の持ち込みを家族に促している。入居者の状況を確認しながら、使いやすいように配置を変更している。居室に家族の写真を飾るなど、入居者が安心して居心地良く暮らせるよう工夫している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	施設内は整理整頓を行い、自由に動く事ができるよう取り組んでいる。お風呂場に手すりを増設し洗面台は棚を設置し使いやすい閑居を作っている。		